

書評：久野量一著『島の重さをめぐって キューバ文学を読む』 (松籟社2018)

石 井 登

現代日本における海外文学作品の受容は、2010年の前後に、大きな変化の時期を迎えていた。池澤夏樹氏の個人編集による河出書房新社の『世界文学全集』の出版が始まったのは2007年であり、ほぼ同時期に東京大学現代文芸論研究室では、沼野充義氏を中心に「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」という研究プロジェクトが実施された。研究成果報告書の中に、研究の問題意識として挙げられる次の文を読むことができる。「グローバル化と言っても、国や言語の境界を越えていこうとする傾向と、境界の中にとどまって伝統的な価値を守ろうとする傾向とが、相互にせめぎあっている」。このプロジェクトは2012年に終了したが、久野量一氏によるキューバ文学研究をまとめた著書『島の重さをめぐって キューバの文学を読む』は、その主な論文の初出が先のプロジェクトとほぼ同時期となっており、恐らく、いわゆる世界文学研究のスタンスとその問題意識に近いか、共有しつつ考察されたものであると思われる。この海外文学受容と研究の立ち位置を考慮しつつ、久野氏の著書を読むと、その軸、あるいは核になる部分が見えてくるだろう。

著書のタイトルにある《重さ》という言葉について考えてみると、それは個々の物体が持つ目方という特徴であると同時に、この地球上においては、物が引き合う力、すなわち引力という関係によってそれぞれの物体に生じる特性でもある。つまり、《重さ》とは相対的な関係から成り立つものであると言える。この言葉に目を付ける久野氏の読みの鋭さに驚くばかりである。島、つまりキューバとその文学を、この国出身の作家ビルヒリオ・ピニエーラの言葉である「島の重さ」と題された詩の解釈から捉え、もう一方の詩人ニコラス・ギジェンと比較し、そこからギジェンの「肯定の詩学」とピニエーラの「否定の詩学」という二つの方向性を読み解く。キューバについてある程度知るものであれば、直ちに理解できる革命派と反革命派、あるいは親カストロと反カストロの二者択一への道を辿りそうであるが、この書の主題がそこに在るのではないことが《重さ》という言葉を読み深めることで見えてくるだろう。さらに言うならば、序章以降、この《重さ》に関する議論はほとんど現れないが、国と国、作家と作家、あるいは政治体制などが《重さ》という関係性についての議論の具体例として示されるのである。

この書は序章から始まり、以下九つの章からなっているが、これらを三部に区切って論じている。序章では、まず先に挙げたこの書の研究テーマの中心となる「肯定の詩学」と「否定の詩学」の定義が行われている。「ピニエーラとアレナス」と名付けられた第一部ではピニエーラとレイナルド・アレナスについての論考となる。第一章では、ピニエーラの短篇「落下」の解釈を行い、そこに「断片の世界、互いにかかわりをもたずに散らばっている世界」としてのキューバ島の姿を読み取る。この章の最後に示される苦痛と快楽の関係は、同じ一つの物事が相対的に複数の側面を持ち得ることを示している。「否定の詩学」としてのピニエーラ作品は「悲劇的ヴィジョン」を持つものではないと久野氏は述べる。ピニエーラ作品解釈としての章ではあるが、著書全体の文脈として、キューバ島という「かかわりをもたず散らばっている世界」の中での相互の関係性を暗示していると言えるだろう。第二章では、アルゼンチンのブエノスアイレスへと渡ったビルヒリオ・ピニエーラの姿を紹介している。ここでは当時の文芸

雑誌の紹介やヴィトルド・ゴンブローヴィッチの『フェルディドゥルケ』の翻訳の様子などを読むことができるが、重要なのは、ポーランド人作家のスペイン語に翻訳された小説がアルゼンチン文学として読まれていることと、ピニェーラによって提起されたキューバ文学の実体についての疑義である。「ヨーロッパの墓場」の一つとしてのキューバの文学への批判が、反転してキューバ文学としての特質を示すことになる。キューバはピニェーラを介して、アルゼンチンやヨーロッパとの関係から自国の文学を見出す可能性を持つことになるのだ。第三章では、ピニェーラの文学の系譜に連なるレイナルド・アレナスが論じられる。〈革命の申し子〉として生まれた作家アレナスが、ピニェーラとの出会いを通して〈反抗する作家〉へと変貌するのは、「読めと言われるものを読むために、書けと言われるものを書くために識字運動が進められたかのようにアレナスの目には映った」ことで、キューバ革命と文学との関係が垣間見えたからであろう。ピニェーラの没後、革命とキューバ文学の関係の一つの在り方としてのアレナスの生涯は、本人によってゴキブリと見なされたが、われわれ読者はこれを否定的側面からのみ読むことは決してないだろう。キューバ文学の多義的な姿を知るための道標が久野氏の論考によって示されているのである。

第二部は「革命と知識人」と題され、その中の第四章ではキューバの知識人、ラファエル・ロハスとキューバ内外の知識人たちによる公平性についての評論、第五章ではエドムンド・デスノエスと『低開発の記憶』のヴァリエーションについての研究、そして第六章ではアントニオ・ホセ・ポンテとカリブ海文学の受容について論じられている。紙面の関係もあり、詳しくは触れないが、いずれもその題が示すように、キューバの外での経験を持つ知識人たちがキューバの作家と文学を、そして革命をどのように捉えてきたかを知ることができる良い教材となるだろう。また、島、つまりキューバの文化がソ連など他の国との関係からキューバ文化たり得たことも再確認できるはずである。

第三部は「冷戦後のキューバ文学」と名付けられ、ポスト冷戦の時代である現代のキューバの文学を論じている。第七章はキューバの「革命文学」の状況の変遷を多くの作家たちを通して紹介した研究で、第八章ではポストソ連時代のキューバ文学として、アデライダ・フェルナンデス・デ・フアン、ヘスス・ディアス、アナ・リディア・ベガ・セローバラの人と作品を論考し、革命キューバと最も重要な位置にあったソビエト連邦との関係の終焉とその後を問うものとなっている。そして、最後の第九章は反マッコンド文学と題され、マッコンド文学とメキシコ人作家、ダビー・トスカーナの関係、そして彼の作品が論じられる。『マッコンド』とはガブリエル・ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』の舞台となるマッコンドをもじって付けられた短篇集のタイトルであり、アルベルト・フゲーとセルヒオ・ゴメスの二人の編者による宣言から、ガルシア＝マルケス以後のラテンアメリカ文学の方向性を示すものであった。さらにこのマッコンドの文学から外れる、つまり消費社会の文化から外れ、第三世界の文学を標榜するものとして、久野氏はメキシコで書かれたキューバ文学という在り方を提示している。

キューバの国民文学を関係性から捉えて相対化しつつ、そこに存在するキューバ文学の個性や独自性を改めて問い直す久野氏の仕事は、非常に現代的な文学研究であると同時に、膨大な資料や作家たちの紹介は、キューバの文学史を知る上で欠くことができないものである。またグローバルズムとナショナリズムがせめぎ合う現代社会と現代文学の研究動向の中でも、一つの手本となりうる重要な仕事だと言えるだろう。そして「キューバ文学は一つ」の意味の変遷のように、この国の文学は非常に動的であり、常に刺激的であることを久野氏の著書は教えてくれている。